

双子を名付ける事と殺す事

小馬 徹

連載第46回以来、双子の名付けをとりあげて様々に論じてきた。ただ、ここ数回は、「双子のパラドックス」、ならびにその解決法に関わる慣行とその論理の考察に紙数を割いた。これは、アフリカの人々の名付けをめぐる現象を考察するという、本稿の目的をかなり逸脱する展開だという印象を与えたかも知れない。

だが、実はそうではない。引用したアフリカ各地の様々な双子慣行の分析は、「名付ける事」が「殺す事」の対極をなす事実を幾重にも厚く浮かび上がらせた。我々は、双子慣行の考察を通して「名付ける事／殺す事」という二項対立を取り出し、それを人間の営みのより大きな脈絡に位置付ける前進を果たしたといえる。

「強い論理」と双子の命名

ここでもう一度「双子のパラドックス」に立ち返ろう。そして、積極的にであれ消極的にであれ双子（の両方または一方）を死に至らしめる「強い論理」と、双子（の両方または一方）を自らの集団の何らかの外部へと排除する「弱い論理」とを分析概念とする、このパラドックスへの対処法についての仮説を思い出そう。

「強い論理」に従う人間集団では、双子は生後間もなく死すべき存在となるがゆえに、双子に特別な名前や象徴性を与える可能性が低いと予想される。双子の両方を死に至らしめる場合は特にそうだろう。乳幼児死亡率がきわめて高かった伝統社会では、アフリカに限らず、赤ん坊が幼児期を終えるまでは全く命名しないとか、正式の名前を与えないという慣行が広く見られた。存在しえない者には、あえて名前を与える必要はない。一旦名前を与えれば、夭逝した場合でも、正式の儀礼によってその存在の消滅を公示して、社会関係の再調整を図らなければな

らなくなる。だから、生きられない者には名前を与えないのである。

一方、双子の一人だけを死に至らしめる場合はどうか。残された双子の片割れは、今や親族内で単一の地位を占める普通の人とかわらない。そう見なしてごく普通の名前を与える場合と、やはり双子である記憶を書き込んだ名前を与える場合のいずれもが考えられるだろう。

「弱い論理」と双子の象徴性

他方、「弱い論理」に従う人間集団では、双子は生物学的に存在する事実は容認されたうえで、なお且つその社会性を否認される。だから命名され、しかも集団の外部へと排除されるべき運命をもつ者である事を特殊な名前によって印付けられ、残余の人々からはっきりと区別される可能性が高いだろう。さらに、双子の一方を自集団内に残しもう一方を外部へと排除する場合には、両者の運命の対極性を際立たせる命名がなされる可能性が小さくないと予想できよう。

それでは、前回問題にした「双子のパラドックス」への第三の対処法を取る人間集団の場合はどうだろうか。それは、例えばスーダンのヌエルのように、構造的には一つである双子の人格を聖なる次元に結び付ける一方、経験的には紛れもなく二つである双子の身体を俗なる次元に結び付け、そうすることで双子を社会構造から切り離さないという対処法である。

この場合、双子の存在を聖なる領域に結び付ける論理は双子の名前に直に反映され易いはずだ。ヌエル人は飛ぶことが得意な鳥の名前で双子を呼び、彼らが神と人との仲介する事を象徴的に表現した。また、ガーナのグレンシの人々は、双子の初生児を「天の神」、次生児を「大地」と呼び、ヌエルとは異なる仕方で双子

の同様の仲介性を象徴した——それぞれの論理の委細は、前回詳しく分析した通りである。

つまり、双子の存在に象徴性が付与される傾向が著しいのは「弱い論理」による対処法や第三の対処法をとる場合で、特に後者では名前にもその象徴性が反映され易いといえよう。

社会的創造としての第二の命名

さて、ここでもう一度「名付ける事／殺す事」という二項対立に立ち戻りたい。

人間は、他の動物と同様、種に固有の生への関わり方に基づいて身体を介して環境を分節するが、それと共に人間の身体も分節され、環境と共に起的に現象する。ただ、人間は、音と意味の二つの水準で分節される〔有節〕言語を獲得した唯一の動物であるから、身体によると同時に言語によっても環境を分節し、その結果、身体を一定の自然環境から解放する。しかも、後者の作用が前者の作用を圧倒し、それゆえに、人間にとっては、命名こそが存在の根源的な喚起力となっているのである。

ところで、本連載の第1回で、命名という行為の二つの次元に触れた。その第一が命名行為によって外部環境を分節して存在を新たに喚起する事（「神の命名」）、第二が既に存在しているものに名前を与える事（「アダム命名」）である。第一の命名が言葉による分節そのものの働きに依拠するのに対して、第二の命名は身体による分節を前提に、言葉による分類をそれへと寄り添わせるものである。

この世の中に生み落とされた眼前の赤ん坊に名前を付けるのは、この第二の命名行為であるに違いない。しかし、それは赤ん坊の存在を社会的に認知する創発的な行為でもあり、（殊に伝統社会では）社会的認知なしに生きていけない以上、いわばその赤ん坊の存在を社会的に創り出す行為だといえるはずだ。それゆえ、第二の命名も単純なレッテル貼りではない。

名無しの権兵衛という名前

さて、西アフリカのカソンケ社会では、奴隷

には名前を与えなかったが、それは奴隷を人間とは異なる者と見なす手段であった——連載第42回参照。奴隷とは、その主人に生殺与奪の権を握られた存在である。すると、双子の赤ん坊を名付けない事は、その子の生殺与奪の権を握る事、端的にはその子を殺す事とはほぼ同じ意味をもつ事が分かるだろう。こうして、双子の観念複合では、「名付ける事／殺す事」という二項対立が広く現象するのである。

ところで、モンゴルには「名なし」という名前の人が少なからずいる〔田中克彦『名前と人間』1996〕。ただし、「名前がない」事を意味する「名なし」のような名前（いわば名無しの権兵衛）は、名付けの拒否を意味してはいない。「名なし」も立派な名前であり、田中のいうように、名前を通じて邪悪な力が及ぶのを忌避するための名付けだと考えられる。モンゴルの「名なし」氏は、この名前で社会的な認知を受け、他の人々と全く変わる事なくさまざまな社会サービスに与っているのであって、いかなる意味でも名無しなどではない。

ただし、自分自身の実子に最後まで全く名前を付けなかった実在の人物が知られている。フランスのヨアニイ伯がその人で、子供に完全な自由を与えてやりたいと願ってそうしたのでたと伝えられている。

無論、ヨアニイ伯は自分の子供の社会性を抹殺しようとしたのでは毛頭なかった。だから、ヨアニイ伯の息子を迎え入れた人々は、彼に言及し、名指す必要を免れる事ができなかった。彼は、何時しかポアン・ド・ノム（*point de nom*）と呼ばれるようになった。これは「彼は名前を一切もっていない」（*Il n'a point de nom.*）という文を名詞化したもので、いわば「名無しの権兵衛」に当たる。ヨアニイ伯の高貴な志を知りながらも、人々は彼の息子を結局「名無しの権兵衛」と呼ぶしかなかった。名前を否認するとは存在を許さない事、つまり殺すと同じ事なのだから。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）